

---

# 青い教会

reddresscoco

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

青い教会

### 【Nコード】

N4646M

### 【作者名】

reddresscoco

### 【あらすじ】

ていなとはくゆの夜の対話

生命は、その生まれた瞬間から死に向かつてひたむきに歩み続ける。

丁奈<sup>ていな</sup>は、白由<sup>はくゆ</sup>と仲が良かった。

ざわざわざわ。こしょこしょこしょ。少し前なら、そんな騒ぎの一つも起こっただろう。だが今は、決してそんなことはない。たとえ、丁奈が天使の生まれで、白由が悪魔の生まれであつたとしても。

もちろん、今はそんなこと気にする者はいない。  
天使も悪魔も平等。小さいことには構わない。くだらないことが平和を乱す。

あの災害のおかげで、世の者たちは永遠の平和を手に入れた。永遠の自由を。

それは、「覚えている」ということを、禁忌たらしめた。

丁奈は、過去の記憶を失わなかった。おそらくは、白由も。けれど白由に、覚えているんでしょう？ と問いただしたくても、それはできない。

夜の教会は、夜の境界。昔の話だ。災害が、出入り口をふさいでしまったのだから。もう、あちらの世界に行くことはできない。

夜の教会は、今もひんやりとしている。月明かりは白由の横顔を照らす。薄蒼みがかったガラスを抜けてたどり着く淡い光は、静かな教会に琴線を張る。ここでは、丁奈の白いケープよりも、白由の純青の衣のほうがよく似合う。

絵のないステンドグラスにひびが入っていた。

丁奈はここ数日、教会に通っている。

白由はいつも、誰も礫になっていない十字架の右肩に座っている。どこを見つめるでもなく。

十字架の太くむき出しの金属は、闇の番犬であるかのように、夜の冷気を伝えているだろう。それを、白由は憐れんでいるだろうか。それとも、忠実なクロスに何かを祈るのか。

あの災害は、あなたが引き起こしたんじゃないの？ そうよ。そうに違いないわ。だって、私とあなただけが記憶を失わないなんておかしいもの。…どうやったのかは分からない。だけど、あなたは白由。名門 六見の一人よ。何か方法があるはずよ。…ねえ。どうして？ どうしてよ。なんでみんなから祖先を奪ったの？ こんな、毎日毎日が祭りに暮れていくような空虚な平和の代償に、みんなの記憶を、祖先を、消し去るなんて。

言い出せない言葉の奔流は、せめてもの抵抗に涙腺を刺激する。世のどこかには、水という言葉から青という言葉を創ったものがあるという。淡い光は、透明なはずの涙を、ほら、真意なんてわからないだろう？ というように青く染めた。

どんな事情があつたかは分からない。だけど、どうせ消し去るのなら、私の記憶も消し去ってくればよかったのに…。わたしたち、あなたたちの祖先と同じように、消し去ってしまえばよかったのに。丁奈は、けれど白由に何も聞けないのだった。

白由は、何も言わない。あの災害の後から、ずっとだ。丁奈をいつくしむような目は、前と変わらないのだが。彼女の、風が吹くような、それでいて薄い膜をはられるような、あの物言いを忘れかけている。

だから、丁奈は毎日ここへ来て、えんえんと白由の顔を眺めている。涙は、白いケープが音もなく受け止めた。えいえんと描いて、とわと詠め、とわと描いて、あいと詠め。白由が座っている十字架の礎石には、そう書いてあるはずだった。この十字架は、丁奈と白由がまだ幼いころ、町のものが集まって創ったものなのだ。

白由は、悲しかった。けれど、うれしくもあった。丁奈がこうして来てくれることに。それは、残酷な喜びだ。だからやはり、悲しかった。

あと一言でも、言葉を発すれば、命は尽きる。丁奈に会うためには、丁奈を無視するしかなかった。

六見に伝わるあの術を使うのは、避けたかった。けれど、そうするしかなかった。こうでもしなければ、戦争になっていたのだ。ただの戦争ではない。誰も勝たない、すべての終わりとなる戦争。それだけは、避けたかった。他の世界に存在するすべてのエネルギーを用いて、敵にぶつける。他の世界も、この世界も存在しなくなる。そんな兵器の、発見。発明、じゃあない。そんなものが、そこらじゅうに散らばっていることを、見つけてしまったのだ。

あの術で、兵器を消し、祖先を消し、世の者から過去を奪ってでも、生を祈りたかった。死にゆく他の世界から、体の消滅とともに消えてしまはずの魂をとり、生かす。それが悪魔の役目だった。

ねえ。昔のままが良かったよね。できることなら。

丁奈に記憶を残したのは、丁奈への躊躇と、やがては消えゆく天使悪魔の本分への名残からか。いやそれも、自分だけのエゴか…。

丁奈。

絵のないステンドグラスのひびが大きくなって、隙間風が青い教会を乱さぬうちに、あなたに託そう。死を慈しみ受け止めること、それが、最後の天使の、本分。そうだよね。

白由が最後の一言をつぶやいた時、不思議と涙はこぼれなかったような気がする。相変わらず、風が吹くように、言葉が水であるかのように、彼女は言ったが、薄い膜は、張られなかった。白由の思いは、おいおい伝わっていくだろう。時間は、まだまだあるのだから。ゆっくり、慈しめばいい。

白由と丁奈がこうして会っていたこと、仲が良いことを、世の者は誰も疑わない。

たとえ、暗い教会の琴線が、月明かりで白く染まっても。

おわり。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4646m/>

---

青い教会

2010年10月8日14時23分発行